安楽寺寺報

聞光

第５６号
歓喜会号
2010/8/1

発行所
〒737-0054
呉市上山田町2-28
安楽寺
TEL0823-21-7561

教団の論理を超えてこそ

信楽峻麿

私たち真宗信者は、すべて真宗教団（本願寺教団）に所属しているわけです。ところで教団というものは、教えにもとづいて集まったものの団体のことで、私たちは親鸞聖人の教えを学ぶために集まっているわけです。

だから教団とは、一般の会社とか、政党などとは異なっております。会社や政党などは、経済的な利潤を追求するためとか、または自分の主義、主張を実現するためとか、特定の目標を成就するために集まったもので、その何れもこの世俗の中での営みに他なりません。

しかしながら、教団というものは、そういう世俗の営みを超えて、私たち一人ひとりが教えを学びながら、浄土を目指して、自己成長をとげていき、又そういう仲間の連帯によって、この世の中を少しでも明るくするように願うものです。だが、その教団というものが、世俗のただ中において成りたっているところ、時には、その教えに背いてあやまった道を進むことがあります。

私が懇意にしている熱心な女性門徒の話です。彼女は早くより、エコライフ・環境問題に取り組んで、積極的に活動されている人ですが、先日西本願寺から、そのことをめぐって原稿の作成を依頼されました。そこで彼女は、自分自身も家庭における節電を工夫して、消費量を今までの半分にまでに減少したことや、今問題になっている、山口県上関の原子力発電所の建設に、反対する主張を書いたところ、西本願寺当局より、このような原稿は困る、本願寺教団の門徒の中には、電力会社の役員や従業員がおられるので、電力節約や、発電所の建設反対はもってのほかだといって、その原稿がボツになったそうです。

今日の世間で大きな問題となっている、エコライフや原子力発電所のことについては、教団内部の事情で、一切発言してはならないというのです。ここには教団のエゴイズムがもろにうかがわれるところで、地球全体、人類の未来にかかわる、これほど重大な環境問題についても、本願寺教団は何ら発言してはならないというわけです。これが今日の西本願寺の社会的認識です。

このようなことは私も経験したことがあります。私はかつて多くの仲間とともに、平和憲法を護るために、「本願寺九条の会」という会を組織しました。今では千数百名の会員を擁し、毎年全国大会を開いて随分盛んです。しかし西本願寺当局より、本願寺教団の中には、戦争に賛成する人もいるから、本願寺の名称を使用してはならないといわれました。真宗の経典、『無量寿経』には、「戦争をしてはならない」と説かれているにもかかわらずです。本願寺教団は、内部の事情によっては、その教言さえも無視するわけです。

この本願寺教団は、常に世俗的な事情ばかりに気をつかって、教法が指示している方向を全く見失っているのです。そこにはいかなる教えも生きてはいないのではありませんか。この教団は世俗の集団と全く同じです。

その意味では、私たち念仏者が、まことの真宗の教えを生き、真実信心の道を進むためには、この教団の論理、その枠を、時には勇気を持って超えていくことも大切でしょう。

安楽寺法要案内

九月	彼岸会	日時	９月１８日（土）朝・昼
		講師	藤　井　　晃　先生
		テーマ	「先に生まれん者は後を導き、後に生まれん人は先を訪へ」
一〇月	顕真・永代経	日時	１０月１６日（土）朝・昼
		講師	築　田　哲　雄　先生
		テーマ	「救われるということはどういうことですか」
十一月	報恩講	日時	１１月２０日（土）朝・昼 １１月２１日（日）朝・昼 朝10:00～・昼13:00～
		講師	信　楽　峻　麿　前住職
		テーマ	お念仏とは何ですか
十二月	成道会	日時	１２月４日（土）朝・昼
		講師	法　林　英　俊　先生
		テーマ	浄土とは何ですか

※１２月の成道会法要の日程が下記の通り変更になりました。皆様のお家の安楽寺法座カレンダーの１２月を訂正してください。

~~12月12日(日)~~→12月4日(土)

安楽寺聖典カバー完成

安楽寺生活聖典のカバーを作製しました（¥350）。永代経のお扱い品として作製したのものですが、まだ残部がありますので、ご利用下さい。

正面上段には、前住職が揮毫しました「顕真」という言葉を載せています。親鸞聖人が顕してくださった真に、私たちも出会いたいという願いです。

そしてその下段には、前頁にも書かせていただきましたが、出曜経の経文を入れさせていただきました。今回の「聞思」に書かせていただいたとおりで、この娑婆は何がおこるかわかりませんが、何が起ころうとも大丈夫といえるいのちを育てたいと思います。

そのために、日々の生活の中で、念仏しつつ生活聖典を開き、私たちのいのちの行き先を聞いて参りましょう。

安楽寺マンガ通信

（第10回）

信楽めぐみ作

聞思

歓喜会

信楽晃仁

今年の梅雨はたくさんの雨を降らせて、全国に爪跡を残しました。その梅雨がやっと明けたかと思うと、今度は猛暑になりました。雨が降れば水害で人が流され、照れば照ったで熱中症になる。雨が降れば人が亡くなり、照れば照ったでまた人が亡くなる。自然の厳しさと共に、人間の弱さ、はかなさを目の当たりにしました。中でも、島根で、母親と十一歳のお姉ちゃんと、五歳の弟が寝ているところに、大雨により裏山の岩が落ちてきて、下敷きになり、お母さんと五歳の男の子が亡くなったという事故がありましたが、まさか寝ているところに岩が落ちてくるなんて事をだれが考えたでしょうか。本当に火宅無常の世界とはこのことだと思います。

人ごとではありません。いつ何時、私たちのいのちも、私のまわりのいのちも終わるかも知れません。そのはかなさを自覚することが必要です。

そのはかない人生をどう生きるか。それがお盆の伝えてきた中身です。

お盆といえば盂蘭盆会。この言葉はインドのウランバナという言葉に、中国で盂蘭盆という漢字を当てはめたものです。その言語のウランバナは救倒懸と訳され、逆さ吊りの苦しみから救うという意味を持ちますが、これは私たちの日々の生活とは幸せを願いつつも、それとは逆の苦しみに向かっていると言うことです。つまり幸せを求めながら、私たちは苦しみの世界、地獄に向かって足を進めている、ということです。その事を知らせ続けてきたのが千四百年以上も続いたお盆です。

そこで盂蘭盆経はそれをどのように伝えたのかというと、二つの苦しみから読み取ることができます。

目連尊者のお母さんは何故餓鬼道に落ち、苦しまねばならなかったのかというと、別に大きな悪事をはたらいたわけではありません。ただ我が子目連がかわいくてかわいくて、そのかわいさの余りに、我が子にばかりものを与え、他の子には与えなかったというのです。その罪でこの餓鬼道に落ちたといわれます。しかしそうすると私たちもみな餓鬼道行きです。我が子がかわいい、他の子がどうなろうとも、我が子が良ければいいと言うのが親心です。

しかし仏教はその心が、苦しみの種であり、餓鬼道行きの原因だと説きます。私たちがもっとも深く、純粋なものとして疑わない母親の愛を、それが苦しみを産みだす元だというのです。私たちがよかれと思ってやっていることも、餓鬼道、地獄への歩みであることをこの中から教えられます。「末代無智と」いわれる本人の自覚が必要です。

そしてもう一つの苦しみは目連尊者の苦です。目連尊者はなぜ苦しまねばならなかったかというと、お母さんが迷いの世界、餓鬼道へ落ちたからです。身内が、そして先祖が迷い、三悪道へ落ちるということは、後に残った遺族、親族が苦しまねばならないということです。

先般、淀川キリスト教病院名誉院長の柏木哲夫先生が広島に来られました。先生はホスピスの第一人者であり、淀川キリスト教病院はそのホスピスを日本で最初にはじめた病院です。その先生が、家族をガンで失った遺族にアンケートを取ったそうです。そのアンケートは、「何がこの別れの苦しみを癒してくれましたか」というアンケートを取ったところ、一番がダントツの６５％で、「故人の安らかな死が、私の心を癒してくれました。」と答えたそうです。

安らかな死とは、苦しみのない死です。じゃその苦しみとは何かというと、四つの苦しみだといいます。一つに肉体の苦しみ。二つに心の苦しみ。三つに社会的な苦しみ。四つにスピリチュアル（霊性・魂）の苦しみ。といわれました。身体の苦しみは今は医学が進歩して、ほとんどとれるようになったそうです。そして心の苦しみも社会的な苦しみも、人間の力でどうにかなる所まで来ているそうです。しかし最後に残るのが魂の苦しみです。「私は死んだらどうなるのか。死んだらどこへ行くのか。」といった私たちのこの命の行き先の不安が残るとき、私たちは家族のものに苦しみを残してこの世を去らなくてはなりません。ましてや間違いなく迷いの世界へ行く私であったとしたら、家族は一生苦しまなくてはなりません。その苦しみを我が子に、我が孫に残していいものでしょうか。

私たちは弱くてはかない人間です。いつどのような形でいのち終わらねばならないかも知れません。しかしいつどのように終わろうとも、我がいのちの行き先がわかっていれば、本人も遺族も安心できます。そのことが決着ついていない本人が最後まで苦しみ、その苦しみを目の当たりにした遺族がまた一生苦しみを背負って生きて行かなくてはなりません。その苦しみの連鎖を断てというのが盂蘭盆です。

幸い私たちにはそのいのちの行き先が伝えられています。念仏申す私たちは、この世の苦しみを超える道に今すでに会っているのです。そのことを本当に自覚した人は盂蘭盆会を歓喜会といいかえました。今救いの法に会ったのではなく、すでにその法によって決して迷わぬ身と自覚できたものが、歓喜会と呼んだのだと思います。

本当に何が起こるかわからない私たちの人生ですが、何があっても変わることなく、私の人生を支え続けてくれるみ教えに出会っていきたいものです。

最後に安楽寺聖典カバーにも入れましたが「聞くを恥じて問わずんば、後に恥を来すべく。生死を畏れずして、放逸にすぎなば、後に畏れを来すべし」という出曜経の言葉があります。「朝には紅顔あって、夕べには白骨となる身」の私たちです。

「きょうとも知らず明日とも知」れない私たちのいのち。それも「我やさき人や先」と、私が先か子どもが先か、孫が先かも知れないこの娑婆です。「生死を畏れずして放逸に」過ごしたならば、必ず私は苦しみ、悲しみ、寂しさといった畏れに悩まされることになります。どうかこのお盆に本当の仏法に出会いましょう。必ずや私たちの今後の人生に大きな光を与えるものとなります。

仏事のイロハ

御布施の意味

法事や月参りなど、僧侶を招いて仏事を勤める時、お布施がわたされますが、このお布施の“額”が気になる人がいます。

多すぎて困ることはないのですけれど、要は“相場”を聞きたいのでしょう。

そういうお尋ねがあってもできるだけ金額をいわないようにしています。それはお布施が“自ら進んで上げる”性質のものだからです。ただ言えることは「よろこんで精一杯する気持ちが大切である」ということです。

そうした金額を気にするよりも、もっと考えていただきたいことは、お布施本来の意味です。

習慣化される中で、私たちはつい、お布施を一種の“報酬”のように捉えてはないでしょうか。僧侶が読経したことに対する、代価、御礼として扱ってしまいがちです。しばしば表書きに「お経料」とか「回向料」記した金封に出会いますが、これなどはまさしく僧侶への報酬です。

布施というのは、そもそも仏教の大切な行の一つで「あまねくほどこす」という言葉です。その布施行には、法を説く“法施”、財物を施す“財施”、畏怖の念を抱かせない“無畏施”があります。金封の「お布施」はこのうちの財施にあたるわけです。

浄土真宗では、こうした布施を善根を積んでさとりに近づくための修行とはせず、ひたすら阿弥陀如来のお救いを喜び感謝する報恩行としています。すなわち、お布施は僧侶への“報酬”ではなく、如来さまへの報謝として捧げるものなのです。

第５６号　聞光　2010年８月１日